

の 椅 子

— 長兵衛と権八 —

有 馬 頼 義

角 川 書 店

昭和37年2月10日 初版発行

著作者 あり ま より ちか
有馬頼義

発行者 **角川源義**

印刷所 **中光印刷株式会社**

虚栄の椅子

三三〇円

製本所 株式会社宮田製本所

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見町2-7

振替口座 東京195208番

落丁・乱丁本はお取替えます

目 次

過 去 帳

二度死んだ男

放駒四郎兵衛

お 清

白 い 脚

過 去

政 略 結 婚

白 昼

暑中御見舞

七

一八

三三

四七

六三

八六

一〇三

一一五

一三六

参謀放駒

一三七

一盗二婢

一五五

前触れ

一七三

からみあい

一九一

天敵

二〇八

花道

二二五

血潮

二三五

後記

二四九

カバー
絵

小山田
二郎

虚栄の椅子

〈長兵衛と権八〉

過去帳

いつごろから、江戸の俠客まがやく幡隨院長兵衛ばんえいのことが、僕ぼくの心の中に巢喰うばいはじめたか、今になると、思い出せない。僕は青山で生れ、浅草で育ったけれども、かくべつ、この人物に興味を持つ理由はなかった。小説家になってからも、僕はずっと現代小説ばかり書いて来て、小説家として、自分が時代小説を書くとは、夢にも考えなかった。しかし、僕の生活の周囲に、そういう昔の風の匂いのようなものが、全く吹かなかったわけではない。

僕の家ぼくの家の菩提寺ぼだいじは、広尾の祥雲寺しょううんじという古刹こせきであった。近年、本堂が放火で焼け、古い住職は、その復興を待たずに死んだ。僕は、老いた住職の、かれた声が好きであったが、あるとき、晩年の住職から、こういう話を聞いた。

戦争中、経営難から開放して、小学校の下級の教室になっていた本堂の裏に、楠くすのの老木があった。老住職さえも、その木が、いつの時代に植えられたものか、知らないようであった。それが、二、三年前から、春になっても新芽がふかなくなつた。枝は、風の度たびに、折れて落ちた。住職はある日、植木屋を呼んで、その楠をきり倒して、いくらでもいいから金に代えてくれと頼んだ。植木屋は

「じゃあ、あさってきりましょう」と引きうけて帰つた。

その晩、住職は夢を見た。何者とも知れない容相をした人間が、住職の枕許まくらもとに立ち

「今こそ何の役にも立ってはいないが、私はながい間、この寺を守って来たものだ」とだけ言つて消えたそうであった。

住職は、翌朝、その夢を思い出して、自分の枕許に立ったのは、何者であろうかと考え、そして、多分それは、楠の精であろう、と判断した。住職は、植木屋に会い、楠をきるのをやめてくれ、と言つた。

「驚きましたな、あのときは」と、住職は、僕に言つた。

「枯れた、枯れたと思ひ込んでいた楠が、翌春になると、ごらんの通り、あっちにも、こっちにも、新芽を吹きはじめたのです。人間というものは、いくつになつても、迷いがある。この年齢になつて、教えを受けました」

その楠も、本堂といっしょに焼けた。

祥雲寺は、徳川時代、江戸三寺と言つて、有名な古刹であった。放火で本堂が消失し、それから老住職が死に、新しい住職の手で、本堂の復興がなされた。その前後に、僕の父が亡くなり、寺との交渉が深くなつて、僕は、ある機会に、祥雲寺の過去帳というものを見ることが出来た。ふつう、寺の過去帳というものが、どんなものか、僕はよく知らないけれども、その過去帳というのは、その寺の墓地に葬られた人たちの記録というよりも、代々の住職が、日記のようにつけていた寺自体の記録であった。だから、いわゆる過去帳というものは、別にあつたのかも知れない。その文章の中に、僕の

興味をひいたものがあつた。

浅野の浪士が、本所の吉良邸へうち入ったとき、寺坂吉右衛門という人物がひとり、行方不明になっている。多分そのことは、あの事件の、最も信すべき記録であると思うのだが、その寺坂吉右衛門が、四十七士の切腹のあとで、祥雲寺へ、住職と、碁を打ちに来てゐるのだ。

寺坂が、身分上の理由から、討入り、または切腹の仲間からはずされたらしい、ということとは、周知の事実だが、寺坂が、その後どうしてゐたかについて、書いたものはない。それが、ひょっこり、祥雲寺の過去帳に出て来た。僕は、びっくりすると同時に、ひどく興味を持った。

寺坂は、しかし、祥雲寺に葬られていたわけではなかった。住職と、碁をうちに来ただけであつた。僕は、読みにくいそのくだりを読んでゆくうちに、さらに激しい興味を持った。

紀伊国屋文左衛門が、やはり住職と碁をうちに来ていたのだ。いつの頃か、住職が、正式に、二人を紹介した。文左衛門は、寺坂のことを知っており、寺坂も、文左衛門のことを知らないわけがない。討入りの人数に洩れて、世間から身を隠している寺坂と、尾羽打ち枯らして貧乏をなめている文左衛門の出会いには、やはり、祥雲寺という寺でなければならなかつただろう。それ以外に二人にとって、ふさわしい場所はない。

僕が、歴史の中に、興味を感じたのは、そのときが最初であつた。しかし、興味を感じて、寺坂や、紀文のことを少し調べてみると、それをもつて一編を綴るだけの資料がない。

例えば、紀伊国屋文左衛門は、一人であつたという説と、大儲けをしたのが父親で、吉原で蕩尽したのは二代目だという二説がある。どうせ小説は、絵空事だから、どっちでもいいようなものだが、一代であると考え場合と、二代であると考え場合と、祥雲寺の寺坂との出会いの意味が違つて来るし、年代、年齢の矛盾も出て来る。僕は、そういう風な点に——たとえ小説が絵空事であっても、自分が納得しなければ、書く気がしない。そのときは、調べるだけで終つた。心残りを感ぜながら、十年余りの歳月が経つてしまつたのだ。

そして、寺坂や、紀文のかわりに、幡随院長兵衛のことが、僕の心の中に坐るようになったのは、いつ頃のことだろうか。長兵衛については、芝居や映画の知識が先であつた。誰でも知つてゐる俠客幡随院長兵衛は、英雄であつた。しかし、英雄である限りそれは、僕の興味をひかない。長兵衛が、水野十郎左衛門の邸の風呂場で殺された、という言い伝えが、誤りであろうと、なかるうと、僕は長兵衛に、東条英機ほどの魅力は感じなかつた。

歴史的信憑性について、僕は何の資料も持たないけれども、昭和三年に、早稲田大学出版部から出た「近世実録全書」の第十巻に、幡随院長兵衛の一代記が出てゐる。その序に言う。

乳柑橙くわんだいだいに對つて曰く、汝我が身の苦きを知らず、我と同じ形をなし、肩を比べんと思ふこそ奇怪なれ、諺に言はずや、臭き物身知らずと、今汝が居る所を見るに誠に斯の

如し、必ず我に楯突くこと勿れと。橙莞爾として笑つて曰く、汝其身の甘きに充りて、我を侮ることの何ぞ斯の如く大甚しきや、我が世に尊ばるる数々を汝に聞さん。抑上月卿雲客より下は万民に至るまで、歳の始に祝はるる蓬萊台の上座を占め、諸人の拜を受くる事は余の果実の無き処なり——次に実を食する時は能く疳癪を癒し、皮を製して飲む時は其効枳殼に齊し、汝は其味甘しと雖も、硯蓋に載せられて僅に酒の下物に宛てらるるのみ、是俳優妓女の其面貌を以て人の欲を希ふに同じ、争でか我が人生に大利益あるに均しからんや、汝必ず其身の甘きを慢ずる事勿れと、乳柑大に慚ぢて返くと、然れば此書に載する所の平井権八は、其容貌美麗にして、男女共に愛づると雖も心様悪しくして、世を害すること蛇蝎の如く、かの優娼輩の媚を街ふより甚し、終に其身非命に死して末代までも悪名を残す、是則ち乳柑の徒に甘きを誇るに似たらずや、然るに幡随院長兵衛は其身卑賤の町人なりとは言へ、智勇兼備して上を敬ひ人を憐み、弱きを助け、強きを挫き、他の災難貧苦を救ふこと、恰も病を癒すが如く、其功德の著しき橙の能あるにも比へつべし、此人若も戦国の世に生れなば、天晴一方の大將ともなり、終には群主諸侯にも登るべきを、僅に二百有余人の俠客輩の棟梁として、世を終へしこと、実に惜みても余あり、予や聊感ずる所あり、乃りて拙き事を厭はず、此一代記を編述して世の童蒙を示すと云ふ

奇癖道人識す

この序文が書かれたのは、そう古いことではない。江戸時代から、幡随院は、そういう風にあつかわれ、伝承されたようであった。僕は、その扱い方にひかかったのかも知れない。もう一足資料にわけ入ってみれば、幡随院長兵衛の生涯は、確かに書き記されてはいない。一度は書かれたのかも知れないが、現在残っている長兵衛に関する記録には、矛盾が多すぎるようである。出生についても、その時も、処も、明らかでないし、死没についても同じことである。最も滑稽なのは、幡随院に、平井権八をからませたことで、二人の別々の古事を調べると、同時代の人ではなく、権八は、長兵衛の死んで後に生れているようである。

同じことが、前記の、寺坂と、紀文についても言われるかも知れないけれども、この二人のからみ合いの原型は、芝居にあったと思われる。歴史は、埋没したかのようであった。

例えば、僕自身が、一人の被害者かも知れない。北九州の三家の大名、即ち、黒田、鍋島、有馬の家には、猫騒動という伝説がある。自分の家の古いことは、調べることが出来るから、調べてみた。しかし、もともと、猫が化けるわけがない。すべて、いわゆるお家騒動、相続争いに、猫をからませて、奇を求めた作者の筆のはしりのようである。こうして僕たちは、つくられた伝説や、つくられた歴史を過去に持つようになつたのだ。しかし、そこまで調べて来て、僕は、やはり、幡随院長兵衛の生涯は、僕が、それをもう一度再構成し

て書くべきだ、という結論に達した。僕は、長兵衛の墓のあ
る浅草北清島町八一源空寺という寺を訪ねてみた。僕は、浅
草育ちでその辺を歩いたことがあるが、殊に関東大震災と、
戦災によって、街の様相は一変していた。
住職が、過去帳を、見せてくれた。

慶安三庚寅年

肥前唐津、波多三河守家臣塚本伊織倅伊太
郎ナリ

四月十三日弔二十六日

善養道散勇士

幕四六役十二僧施主朋友大勢江戸名高キ長
兵衛ナリ俗ニ幡随意長兵衛ト云。本名塚本
長兵衛ト云、山脇惣右衛門引付旦那委敷ハ
古帳ニ有。

右金五十両供養代花川戸処々朋友ヨリ石塔惣右衛門ヨリ立
ツ後代ニ及共無縁ニナラザル様ニ（三字不詳）地蔵尊二体
ヲ作立有。

二月十四日

善養寿散信女

山脇惣右衛門娘幡随意長兵衛妻ト云ナリ詳
ナリ

ここで問題になるのは、この過去帳が、長兵衛の死没を、
慶安三年としている点だ。長兵衛が、三十六歳で死んだこと
は、別の資料で明らかであるから、逆算すると、元和元年に

生れたことになり、父である塚本伊織の事蹟と矛盾する。僕
は、歴史家ではないから、少しぐらい矛盾には目をつぶるけ
れども、長兵衛の死没が、明暦三年と考えた方が、計算が合
うのだ。明暦三年没ならば、元和八年の出生であろう。一応、
その説を、ここではとっておく。

そこで、本題へ戻って、何故僕が、この、よくわけのわか
らない幡随院の生涯を書く気になったか、ということに触れ
なければならぬ。そこで、僕はもう一度、僕自身の少年時
代の思い出を書かなければならないだろう。そこが、長兵衛
と、僕の、唯一の接点になるからだ。

昔風に言うと、僕は早生れで、六歳の春から幼稚園に行き、
七歳で小学校へあがった。そのとき、祖父母の住んでいた浅
草をはなれ、青山の市電の車庫裏へ越していた。幼稚園へ行
っている六歳の九月一日、関東大震災が起った。僕は今でも
よく覚えているが、その朝一時間ほど、雨が降り、十一時頃
東の方に、巨大な積乱雲が見えた。その雲は、白くなくて、
幾分黄色味がかり、不吉であった。十一時五十八分、最初の
地震が来たとき、僕は庭に面した階下の部屋におり、父母や、
兄姉たちは、食堂にいた。もちろん、大人たちの方が、庭へ
飛び出すのは早かった。僕が、大声で呼ばれて、縁側まで這
い出たときは、二階の瓦が、雨のように、庭へ降っていた。
「座蒲団をかぶって！」と父が言ったので、座蒲団を一枚頭
の上にのせて、縁を飛び降りたのだが、あわてていたので、
逆に、縁の下へころがり込んだ。誰かが夜具を頭からかぶっ

て、僕を助け出しに来てくれた。その夜から野宿がはじまり、四囲の空は火になった。僕の家は、土蔵がくずれ落ち、二階が傾いただけであった。

しかし、余震が度々来るので、野宿は五日ぐらい続いたと思う。父が、近所のパン屋を回ったが、既に何もなかった。それで、今の狹窪^{きさくぼ}辺まで、食糧を買出しに行った。余震はおさまったけれども、その家は、既に、安心して人の住める家ではなかった。

浅草にいた祖父母の家はどうなったかというところ、これは、奇蹟的に焼け残った。今、ドヤ街として高名な、都電の山谷停留所から、まっすぐに大川へ向った、つき当りがそれで、そこから言問橋^{ことまきばし}へかけて、ちょうど三角に焼け残ったのだ。

僕の父は、早く祖父母から離れたかったのだろうし、僕達が学校へ行くのに、浅草は遠すぎたので、一年ばかり寄食したあとで、今度は青山南町に新築した。そして、小学校へは、そこから通うようになった。北町の半壊の建物は、修築して、父の弟の一家が住んだ。

僕は、一口に言えば、孤独な少年であった。三つ上に姉がいたが、あとは十歳以上上ひらいている。三つ上の姉も、学校へあがる頃から、上の兄妹たちの仲間にはいった。僕は、ひとりっ子と同じであった。灰色の孤独は、生活に困ることのなかった僕の心を埋め、僕は、何につけても、たった一人で遊ぶ習慣を持った。頭は、いいと言われた。人一倍、からだに似合わず、大きな頭を持って居り、近所の子供が、時に「頭

の大きな三郎さん、遊びましょ」と門の前で言った。三番目の男の子だから、そう言ったのだらう。しかし、僕は、学校でも、家庭でも、友達とつき合うことを喜ばなかったようであった。僕の父は僕に、十四インチの子供用の自転車を買ってくれた。その、赤く塗った自転車だけが、僕を幸福にしてくれたようであった。

震災のあとは、年々復興されていったが、それは今ここでは必要はない。僕の七歳が、そういう風にしてはじまった、ということだけが、重要なのだ。

僕は、学校に、あまり興味を持たなかったようであった。授業が終ると、家へ飛んで帰り、ランドセルを玄関にほうり出して、自転車に乗って家を出た。最初は、家の近くの町を走るだけだったが、後に、青山の電車通りへ出ることを覚えた。南町から、青山通りへ出ると、そこに巨大な、表参道という道が展ける。下り五百メートル、登り五百メートル程の、気の遠くなるように広い、いい道で、そこに東京最古のアパートというものが建っていた。表参道のつき当りは、明治神宮の入口で、左へまがると、練兵場へ出た。練兵場の入口に立つと、その曠野は、少年の目に、世界そのもののように広く見えた。兵隊達が、一日中、そこを走りまわり、夕方になると、汗くさい匂いを残して、どこかへ戻って行った。後になって考えると、麻布にあった、近衛歩兵連隊の兵隊たちであったに違いない。しかし、僕の興味は、練兵場にも、兵隊達にもなかった。

表参道は、立派なコンクリート橋で、渋谷と原宿の間の鉄道をわたっていた。しかし、立派な橋は、そこだけで、もう一つ渋谷へよると、坂に、手摺だけの、狭い橋があった。僕は、その橋の途中に自転車をとめて、汽車の通るのを待った。渋谷から原宿へかけて、少し上り勾配があったのだろうか。長い長い貨物を曳いた汽車は、やがて、あえぎ、あえぎやってきた。ぼつ、ぼつ、ぼつ、と、機関車の煙突は、熱風を吹き上げた。橋の上にいると、いつとき、その熱風の中に包まれた。僕は、それが好きであった。

蒸気機関車が過ぎると、様々な貨物をつんだ貨車が、僕目の下を、ゆっくりとすぎた。僕は最初、その貨物に興味を持ち、それから、飛び降りて、それに乗ったら、どこへつれて行かれるのかと考えた。しかし、それは考えただけで、やめた。少年の心には、それだけで充分ロマンティックであった。僕は、あきずに、上り、下りの貨物列車を待ち、陽が落ちるころ、家へ戻った。別に叱られはしなかった。家の中の誰も、僕が、そこへ行っていることは、知らないようであった。その、秘密の楽しみが、僕の孤独をささえたようであった。

僕は、それにあきると、青山の電車通りを、青山一丁目のあたりまで走った。それも、ただ走るのではなくて、市電の軌道の上を、はずさないで走るのであった。最初はむずかしかったが、すぐに馴れた。電車の数も少ないし、第一自動車というものが通らない。その頃の東京には、もちろん国産車

はなく、奇妙な形をした外国物が、五百台ほどはいっていったに過ぎない。危いことは少しもなかった。

青山一丁目には、巡查が、手動式の信号機をあやつっていた。のんびりした時代だ。「進メ、停レ」、の二つの信号は、巡查が、向うからやって来る電車や自動車を見て、適当にやるのだから、その間隔は、五十秒ぐらいの時もあり、十秒ぐらいのときもあり、もっと長いこともあった。僕は、「停レ」の信号にぶつかると、脚を地面につかないで、何十秒でも待っていることが出来るようになった。馴れてみると何でもありはしない。僕は得意であった。しかし、そのことを、家の人や友達に誇ることを思いつかなかったのは、自転車に限らず、友達と一緒に遊ぶことを少しもしようとしなかったことと同様に、今になれば、ずいぶん不思議なことであった。

乗ることが自由になり、遠出することにあきると、僕は今度は、夜道を走ることを考えついた。当時、懐中電燈や、自転車用のライトはない。カンテラのようなものの中に、ローソクを立てて、走った。前の方は、少しも見えはしない。そのカンテラから、うすいローソクの煙があがると、僕は、自分の自転車が蒸気機関車になったような気がした。その次は、針金をスポークに接触させて、オートバイのような音を立てさせることであった。

僕は、学業を放擲して、孤独な遊びに熱中した。後年、幡随院の少年時代の話をよんで、突然反応したのは、僕の中の孤独な少年時代の思い出であったに違いない。ここ四、五年

来の日本の社会情勢が、幡随院の時代と似ているような気がしはじめたとき、僕と幡随院の結びつきは確定的になったようであった。

当時伊太郎と言った後の長兵衛の父伊織は、事情があつて肥前国島原を追われ、浪人して上野国山田郡桐生の町へ流れて来て農民となった。伊太郎も一人っ子で、友達が無かつたようだ。一人っ子というものは、概して気が弱い。伊太郎は図ぬけて大きな体格をしていたらしいが、その心は、必ずしも、後の男達にふさわしい性格ではなかつたと思われる。そのことが、いつ頃からか、僕の興味をひきつけたようであつた。伝承されている、幡随院長兵衛のことを、全部無いものと考えれば、彼の少年時代は、僕の少年時代と、似ていたのではないだろうか。そう考えたとき、——もちろんそういう風に考えることによってだけ、伝えられる幡随院とは、全くうらはらな幡随院が出来上るのだが、僕は今、自分の勝手な解釈が、どの幡随院長兵衛論よりも、より正しいのではないか、という確信を持つようになった。

さて、一人の少年が、桐生の町はずれにある小高い丘をのぼっていった。少年は、その右手に遅咲きの山桜の枝を、一本持っていた。別に、桜の花を觀賞する年齢ごろではないのだが、何の気なしに、一枝折つたのだ。口笛を——その頃口笛なんか吹いたかどうか知らないが、——吹きながら歩いて行くと、片側が崖のところへ出た。そこで、丘の上からおり

て来る、もう一人の少年に出会つた。三つ年齢下の、庄屋源左衛門の一人息子の源三郎であつた。伊太郎は、黙って通りぬけようとしたが、源三郎は、伊太郎の持っている山桜の枝に目をつけた。

僕のおやじは、偉かつたと思う。僕は自転車という玩具を持つていたために、孤独の中に楽しみがあつた。自転車があつたために、孤独だったのかも知れないが、——子供だから相手の持っているものがよく見えた。

「どこに咲いていた？」と庄屋の息子は言つた。

「もっと下だ」

「低いところか？」

「いや。高いところだ」

「それを、おれにくれ」と、源三郎は、高飛車であつた。庄屋の息子、ということを鼻にかけていた。それが、口では言えないけれど、もとは武士であつた、という伊太郎の勘に触れたようであつた。

「くれ」

「いやだ」

「お前は、おれよりも背が高いから、またとれるだろう」
「いやだ。これは、おれのものだ」と、伊太郎は、つっぱつた。

子供同士の喧嘩というものは、往々にして、相手の年齢を考慮に入れない。庄屋の息子も、一度口に出してしまうと、意地になつた。つかみ合いがはじまつた。源三郎にしてみれ

ば、まずい相手を選んだものと言わなければならない。

「くれ」

「いやだ」

押し問答が続いた末、源三郎の手が、山桜の枝にかかった。伊太郎は、それをはらった。はらい方が強かったかも知れない。源三郎は、実際には、よろけて、伊太郎の方へ倒れかかったのだが、伊太郎は、それを、敵の攻撃と思った。ふりはらった桜の枝が、反射的に源三郎を打ちすえた。それだけならよかった。攻勢に転じた伊太郎のからだのあおりを喰って、源三郎の小さいからだは、崖の方へよろめいて行き、見えなくなった。

伊太郎は、そのときはあわてて、崖の上まで、のぞきに行った。源三郎は、二間ほど下の草むらに倒れていた。恐怖が、伊太郎を襲ったようであった。草をつたって、源三郎の倒れているところまで降りて行くと、源三郎は、死んでいた。桜の枝の一撃ではない。転落したとき、打ちどころが悪かったのだ。僕も幼稚園の頃、友達に打たれて、女の先生の胸に顔を埋めて、泣いた記憶がある。女の先生が、独身であったかどうか知らないが、その女の先生の胸には、あたたかい高まりがあり、そのために、僕はわざと泣きやまなかった記憶がある。しかし、伊太郎は、それどころではない。桜の枝を投げ出して、崖を這い上り、一目散に自分の家へ走った。

「父上！」と伊太郎は、叫んだ。父上というのは、武家の言葉で、浪人して帰農してから禁じていたのだが、動揺してい

た伊太郎は、思わず、昔の言葉を口に出した。

伊太郎の悲鳴で、裏で、薪を割っていた伊織が出て来た。弱り込む年齢ではないのだが、伊太郎が五歳のとき、伊太郎の母である妻を亡くしてから、様々な目に会い武士であった伊織を、老人じみて見せていた。

「何事だ」

「源三郎を、殺しました」

「……………」

伊織には、それだけでは、事情がのみ込めないようであった。殺した、と言っても、伊太郎は、血刀をさげているわけではない。

「山桜の枝を」と、伊太郎は言った。「とられまいとして格闘したのです。そうしたら、源三郎は、崖から落ちた」

「確かに死んだか？」

「多分」

「誰かに見られたか？」

「誰にも、見られなかったと思います」

いったいに、人間は、加害者であるよりも、被害者であった方が——生命に関係がなければ、無事なようであった。親子の運命に蔽いかぶさったものは、勿論罪の意識なのであって、それは、ある意味で、親子が、既に武士ではなくなっている、ということであった。

「死骸は？」

「そのままにして来ました」